

平23
— 中
国 — 1
— 5

答えはすべて、解答用紙の定められたところに記入しなさい。
 「注意」 本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間が食べても生命に支障がないもの、すなわち「食べられる物」と、個々の社会で「食べ物」として認めている物。この違いに気づく人がほとんどいないというのは驚きです。往々にして「食べられる物」ということを、個人的な好き嫌いによる「食べられる」、「食べられない」ということと混同する人がいますが、ここでの「食べられる」、「食べられない」というのは、個人的な好みではなくて、① 人類としてという意味です。

「食べられる物」は人類共通です。ケニアのマサイ人が納豆を食べても、フランス人が納豆を食べても、命に支障はありません。マサイ人もフランス人も日本人と同じ人間ですから、彼らにとっても納豆は「食べられる物」なのです。しかし同時に、② 彼らにとっては納豆は「食べ物」ではありません。他方、砒素や青酸カリをスープに溶かして飲むことは誰にもできません。砒素や青酸カリは、人類すべてにとって、「食べられる物」ではないからです。こうした毒物は、もちろん、「食べ物」としての話題にも入らない物だと言えます。

ここまで話してくると、必ず何人かの人は、「でも、テレビの『何でもビックリショー』で見た」などということをして反射的に思い浮かべてしまいます。くだいようですが、ここでの話では、日常生活にごく当たり前に見られることを一般論として話題にするのであって、きわめて珍しい例についての話をするわけではありません。世界のどこかの人々が、ゴキブリを料理して食べるとしても、その土地の人々にとっては、別におかしいことではありません。ゴキブリを衛生的に、かつ、美味に料理することは可能だからです。ゴキブリは「食べられる物」に入ります。

アジア、アフリカにはゴキブリを「食べ物」として食べる習慣を持つ土地は少なくありません。ヨーロッパにも、船乗り仲間では、食べ物が欠乏した状況ではなくても、ゴキブリを料理したという例があります。薬用にゴキブリを食べる話は、もっと多くの地域で見られます。しかし、この国でゴキブリを実際に食べる話となると、人々は瞬間的に「そんなやつらは本当に人間なのか」と、さげすむ話になってしまいます。ゴキブリを食べる人々の存在すら認めたくないのです。言うまでもなく、ゴキブリは日本では「食べ物」ではないからです。一般的に、どの土地の人間も、自分たちの常識を基準にして、他の人間集団が食べている物から、その人々の人間としての価値までも評価してしまう傾向を強く持っています。この傾向は、③ 困ったことに、世界の人類に共通した「他者の見方」でもあるのです。

いつの時代、どの土地でも、人間は あ から何かを選び、そのことに理屈を付け、自分たちの い として認めています。すなわち、 う は え のほんの一部なのです。

身の回りを見て下さい。道路脇に生えている草木、目の前を歩いている犬、猫、屋根裏のネズミ、空を軽やかに飛ぶトンボ、蝶、それどころかシラミ、ウジ虫、こうしたものも、ほとんどが「食べられる物」です。しかし、そうしたものは、日本では「食べ物」ではないのです。

少し怖い話かもしれませんが、単に生理学的な論理で話すならば、④ 人口が増えて地球が食糧危機になるということはありません。身の回りの草木、犬猫が「食べられる物」であるところか、人間そのものも立派な「食べられる物」の一種だからです。そう考えれば、満員電車は食糧庫のようなものとも言えます。しかし、すでに何度かヒントを与えてきましたように、⑤ 人間には「文化」というものが想定され、人々はそれにしがみついて生きています。現在では、人間を「食べ物」とする文化を持つ社会は、地球上に存在しません。

(西江 雅之『食』の課外授業)による)

〈注〉 ケニア ……アフリカ東部の国。

マサイ ……ケニアなどに古くから住む民族。

砒素・青酸カリ……共に、人体に有害な毒物。

生理学的な論理……ここでは、生物が生命を保てるかどうかという見方。

問一 —— ①「人類としてという意味」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間であれば必ず持っているはずの知能によって判断した結果として、ということ。
- イ 同じ人間同士で限られた食べ物を分け合う大切さを考え合わせた上で、ということ。
- ウ 多くの人々が集まって作られる社会で共通に認められた事からとして、ということ。
- エ 生き物としての人間の身体にとって害になるかどうかという見方から、ということ。
- オ 個人でなく多数決によって人々に支持されたかどうかという見方から、ということ。

問二 —— ②「彼ら^{かれ}にとっては納豆^{なっとう}は『食べ物』ではありません。」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア ケニアやフランスでは、納豆が作られていないということ。
- イ マサイ人やフランス人には、納豆の味は好まれていないということ。
- ウ ケニアやフランスの社会で考える食べ物の中に、納豆はふくまれていないこと。
- エ マサイ人やフランス人は、納豆によって体に良くない影響^{えいきょう}を与え^{あた}られるということ。
- オ マサイ人やフランス人が納豆を食べようとするのは、食べ物が欠乏^{けつぼう}したときに限られること。

問三 —— ③「困ったことに」とありますが、筆者が「困ったこと」だと考えているのはなぜですか。分かりやすく説明しなさい。

問四 ——

あ

 く

え

 にあてはまる語句を、ア・イからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 「食べ物」 イ 「食べられる物」

問五 —— ④「人口が増えて地球が食糧^{しやうりょう}危機になるということはありません。」とありますが、その理由を分かりやすく説明しなさい。

問六 —— ⑤「人間には『文化』というものが想定され、人々はそれにしがみついて生きている」とありますが、それはどういうことか、本文の内容全体をふまえて分かりやすく説明しなさい。

二 次の文を、カタカナは漢字に直し、ていねいに大きく一行で書きなさい。

フユキたりなば、ハルトオからじ。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

やがて冬になった。

ある日、積雪があった。

AとBは、雪だるまをつくった。二人とも、手袋をはめて、雪の球をころがしていた。

その様子を、Aの祖母が窓から首を出して眺めていた。その祖母に気づくと、^①Bは手袋をはめた手を差し示して、笑顔をつくった。

祖母がAをさし招いた。そして、小声で言った。

「あの子は、可愛いとこのある子だね。去年あげた手袋を、今年もちゃんとはめているよ」

そこで、AははじめてBの仕草の意味が分かった。前の年の冬、やはり雪の積もった日、AとBは雪だるまを作っていた。Aは手袋をはめていたが、Bの素手は赤くはれて、霜焼けていた。祖母がそれをみて、Bに手袋を贈った。新しい手袋ではなく、Aのはめている手袋をBに渡し、Aには新しい手袋を与えてくれたのである。

そして、一年たった積雪の日、窓からのぞいていた祖母を喜ばしたBの仕草は、

「もらった手袋は大切に取っておいて、今年もはめていますよ」というものだった。

あらためて、AはBの笑顔を眺めた。「Bが喜んでいてくれる」というよろこばしさと、「Bに恩恵をほどこした」という気持ちとが、Aの心の中で混じり合って動いた。しかし、そのとき心で動いたものは、^②その二つの感情だけではないようにAにはおもえた。それが何か、たしかめようと考えながらBの笑顔に相変わらず眼を向けていると、Bの顔が笑顔のままかすかにこわばったようにおもえた。

その瞬間、Bが言った。

「Aちゃん、屋根に登ろうよ。雪の積もった屋根って、きっとおもしろいぜ」

その言葉に、むしろ救われた気持ちになり、Aはいそいで屋根に登った。

雪は降りやんで薄陽が射しており、平屋建ての家屋の屋根は銀いろに光る斜面になっていた。AとBは、屋根の二つの斜面が交わる稜線にまたがって、あたりの雪景色を眺めまわした。

二人の少年の視線は、遠くの方からしだいに近くに移り、やがて自分たちの足もとに戻ってきた。

「いいスロープができているなあ」

Bは銀色の斜面に目を落として、

「ちょっと、滑ってみようか」

といい、はやくも身体を動かさしはじめた。

「あぶないよ」

Aが言ったときには、すでにBは立ち上がって、足もとにひろがっている白い勾配に眼を落としていた。幾分ふざけ気味にスキーをしている姿勢を取った瞬間、腰がくだけて尻もちをつき、そのまま斜面をずるずると滑り落ちて行った。そして、腰をおとした姿勢のままその身体が軒から飛び出し、あっけなく消え失せた。

「わあ——」

Bの叫び声が空間に残り、そのまま静かになってしまった。平たくきれいに降り積もった屋根の雪の上に、Bの滑った尻の跡が、真一文字に幅広く残っている。

「おーい——」

Aは大声で呼び、おもわず立ち上がったが、よろめいてすぐに屋根の稜線の上に腰をおとした。^③しばらく、雪におおわれた風物と白い屋根のひろがりの中に、すべての音が吸い取られてしまう時間があった。

すると、屋根のすぐかたわらの塀の上に、ひょっくりBの頭が浮かび上がってきた。健康な色で赤く盛り上がった頬の上に、笑っている細い眼があった。

「はっはっは、失敗、失敗」

機嫌よくBは言い、塀から屋根に移ってきた。

「だいじょうぶかあ」

「だいじょうぶさ。下もいっぱい雪が積もっていてね、ふとん綿の上にストンと落ちたみたいなものだった」

Bの頬の赤さは、寒気のためばかりでなく、愉快な冒険をした興奮の色のように、Aの眼に映った。Bが無事だったことに、Aは安堵し、Bの愉快さがそのままなおにAに伝わってきた。

「はっは、びっくりしたよ。だけど、さっきの君の格好は、なかなか傑作だったよ」

海水浴場の飛び込み台の上に、背筋を伸ばして立つ。周囲の眼を意識して、ゆっくりと両手を前に水平に挙げる。さっそうとしたダイビング、とおもった瞬間、空間に投げ出したその男の手足がばらばらになり、尻から海面にストンと落ちる。そのような光景をAは連想し、そういうBに、Aは暖かい友情を持った。

④ その滑稽な格好は、Bが勇者であることを傷つけてはいない。かえって、「Bは冒険のできる男だ」ということが、反発することなくAの心に収まるのに役立つ。

AとBとは、あらためて腹の底から笑い合い、雪の積もった屋根の上で、二人の少年の人間関係はこの上なくなめらかなであり、陽に照らされて銀色に輝いていた。
(吉行 淳之介「子供の領分」による)

〈注〉 平屋建て……一階建て。

稜線 ……ここでは、二つの斜面が交わってできる、屋根の一番高い部分のこと。

勾配 ……かたむき。

安堵 ……安心。

問一 ———— ①「Bは手袋をはめた手を差し示して、笑顔をつくった。」とありますが、「B」は何を伝えるために「手袋をはめた手を差し示して、笑顔をつくった」のですか。

問二 ———— ②「その二つの感情だけではない」とありますが、「その二つの感情だけではない」別の何かとは、どのようなものだと考えられますか。「A」の心の動きを想像して説明しなさい。

問三 ———— ③「しばらく、雪におおわれた風物と白い屋根のひろがりの中に、すべての音が吸い取られてしまう時間があつた。」とありますが、ここから読み取れる「A」の気持ちについて説明しなさい。

問四 ———— ④「反発することなくAの心に収まる」について、

(1)この「反発」とは何に対する「反発」か、説明しなさい。

(2)ここで「反発することなくAの心に収まる」ようになったのは、なぜですか。

平23
— 中
国 —
5 —
5

四 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

虻あぶ

嶋岡しまおか 晨しん

落石におびえつつハーケンを打ち
雷鳴らいめいにおのく手でザイルをたぐり
あせにまみれてよじ登った

*ハーケン……登山の時、岩の割れ目に打ち込む釘くぎのこと。
*ザイル……登山に用いるロープのこと。

山

いつもはおとなしいが
暴れだしたら手のつけられない
大きな牛

ぼくらはそのかたにとまった
虻あぶみたいなものだ

けれど今ぼくらの中を
まじりっけなしの風がふきぬけ
このよろこびのひととき
虻あぶのころは山よりも大きくなる

岩燕いわつばめの歌

*岩燕 ……ツバメの一種。

わかさのこだま
いかにも地球にこしかけて
いっぶくしているぼくらのいのちだ。

問一 「いつもはおとなしいが／暴れだしたら手のつけられない／大きな牛」の連は、何のどのような様子をたとえたものですか。

問二 「虻のころは山よりも大きくなる」には、どのような気持ちが示されていますか。

問三 最後の連には、どのような気持ちが示されていますか。

平23

中

国

受験番号

氏名

解答用紙

評点

四

問三	問二	問一

三

問四	問三	問二	問一
(2)	(1)		

二

--

一

問六	問五	問四	問三	問一
		あ		
				問二
		い		
		う		
		え		